



# 寺嫁まめこの ひとこと通信

お寺のことや仏教のことをもっと身近に！  
そんなことをまずは自分で感じてみよう  
～、と思いながら書いている寺嫁のつぶや  
き。

VOL.31 (令和3年11月発)

仏像を目の前にしたとき、大きさや色・形にかかわらず、自然とその存在のすごさを感じます。それはドキドキするとか、息をのむとか、「おおおお…」や「うわああ…」という言葉にならない感じとか。上手く表現できないのがもどかしいですが。

そういう感情がある一方で、仏像の成り立ちや経典についての情報を知ったとき、「その話ってなんだかなあ…」と疑う気持ちが湧いてくることも否定できず。

だからこそ、東光寺の本尊さんである薬師如来(やくしによらい)のこと、少し考えてみようと思います！

## ～薬師如来にこめられた想いを想像してみた～



まず基本知識としておさえておきたいのは、薬師如来は**左手に薬の壺(つぼ)を持った、仏教界のお医者様**ということ。私たちの病気を治してくれると言われていました。

右手の形は施無畏印(せむいいん)といって、**「大丈夫だよ。安心していいよ。」**ということを表しています。

そして、両隣にいらっしゃるのが日光・月光菩薩(にっこう・がっこうぼさつ)。**24時間、薬師如来をサポート**する体制が整っています。

今でこそ医学が発達し、たくさんの病気が治る時代になりました。だからといって病に苦しまなくなったか、というとそんなことは全然なくて、生きている以上、病気による苦しみは避けられません。そして、その苦しみは今も、昔も、ちっとも変わらないと思うのです。

「これからどうなってしまおうだろう。」という不安や恐怖。

「苦しみが少しでも軽くなってほしい。」「早く元気になってほしい。」という願い。

お釈迦さまの教えにはそういう人々を救う力があり、それが【薬師如来】となったのだろうと思います。

その薬師如来に手を合わせることで、病気との向きあい方や日々の過ごし方に変化が生まれ、不安や恐怖が取り除かれる。それが「病を治し、生きていく」ことにつながっていくように感じます。

そう考えると、苦しみを減らす力は自分自身の中に元々あって、それに気づかせてくれるのが薬師如来という存在なのかもしれませんね^\_^

いつでもあなたの“苦しいときの薬師如来頼み”にこたえられるよう、私たちは本尊さんをお守りしていきます！